

平成19年7月17日

御 中

陳 述 書 (1)

1. はじめに

(1) 私は、 年 月 日生まれで現在満 歳になります。私は、かつては という食品関係の有限会社を経営しておりましたが、現在は引退して妻や長男らと一緒に生活をしています。

このたび、サンラ・ワールド株式会社・増田俊男氏（以下、増田氏）がジャーナリストである津田哲也氏（以下、津田氏）に対し、雑誌『財界展望』（平成14年9月号）に掲載されその後津田氏のインターネットのブログ上でも引用された下記の記述などが名誉・信用棄損にあたるとして損害賠償を求める裁判が提起されたと津田氏代理人の大野裕弁護士（以下、大野弁護士）からうかがいました。

一昨年、増田氏は投資に関するトラブルで、都内の公認会計士から7100万円の支払いを求める訴えを、東京地方裁判所に起こされている。その提訴の直後、原告の公認会計士のもとへ数人の暴力団員風の男が押しかけてきて、『増田先生に対する訴えを取り下げさせろ』と震んだというのだ。会計士を脅しに行った人物は、「(脅迫の)仕事が終わったあと、増田先生は俺に『謝礼だ』と言って100万円を渡そうとした」と証言している。

(2) 私は、増田氏や同氏の妻である江尻真理子サンラ・ワールド株式会社社長（以下、江尻氏）と非常に親しい間柄にありました。

私は、この両氏と付き合いがある関係で、増田氏らが公認会計士を脅迫した事件と『財界展望』にその件に関する記事が載るに至った経緯を詳細に知っております。公認会計士に対するこの脅迫行為を直接実行した 氏（以下、 氏）も私の30年

来の知人でした。

また私は、その後、この脅迫事件に関して神奈川県警高津警察署に呼び出されて任意出頭した 氏に対する口止めを、佐藤博史弁護士（以下、佐藤弁護士）から要求された当事者でもあります。

増田氏が執筆した上記記事は真実ではないとする増田氏らの主張は全くの偽りであることを、私は知っております。

以下、私が知っている事実の概略を、陳述させていただきます。

## 2. 増田氏らと私の関係

- (1) 最初に、私と増田氏との関係から話をさせていただきます。

私が増田氏と出会ったのは平成 11 年のことです。古くからの知人である 氏から増田氏のことを紹介されました。

氏は、昭和 46 年頃から十数年間ロサンゼルスに住んでいたことがあり、在米中、昼屋を営んでいた増田氏と知り合いました。氏は帰国後、たまたま知人に誘われて増田氏の講演会に行き、増田氏と再会することとなったのです。これを機会に二人は組んで仕事をするようになりました。ちょうどこの時期は、増田氏が江尻氏とともに、サンラ・ワールド株式会社が企画した講演会に多くの人たちを集め、その人たちを勧誘して投資金を集めるという商売をはじめた頃でした。氏は政財界に広い人脈を持つ人物ですが、その 氏が持つコネに増田氏と江尻氏は目をつけたのでしょう（なお、サンラ出版が発行していた雑誌『資本の意志』の平成 18 年 3 月号に掲載された 氏のプロフィールを、本陳述書の末尾に【資料 1】として添付します。）。

サンラ・ワールド株式会社の商法は、増田氏と著名人との交友関係を宣伝し、その著名人との共著の本などを自費出版で出すことによって増田氏の知名度を上げ、それによって講演会の集客力を上げ、究極の目標である投資金集めをこれらの客たちから行うという仕組みでした。

氏と永い付き合いがあり、事あるごとに同氏から相談を受けていた私は、同氏から増田氏のことを紹介されたのでした。

- (2) その頃、増田氏と 氏は、休眠中であった中小企業技術振興協会（以下、中技振）という社団法人を買収して、投資金集めに利用しようとして準備していました。増田氏と江尻氏は、のちに詐欺罪で有罪判決を受けた大和都市管財の豊永浩元社長を推薦して、中技振の理事に据えました。氏は、その中技振の運営を増田氏から任され、新宿区四谷 4 丁目の新宿エースビル 2 階に事務所を設けることとなったのですが、この頃から私は、増田氏や江尻氏と会う機会が増えました。

中技振の買収と平行して、増田氏と江尻氏は同じビル内に、サンラ出版という出版社を設立しました。『資本の意志』という雑誌を出版するためです。サンラ出版の社長は江尻氏で、増田氏が編集主幹を務め、氏は編集長に就任しました。出版の仕事は3人とも素人でしたが、『資本の意志』刊行の目的は、投資金集めの宣伝材料にすることでした。「本業」はあくまでも親会社であるサンラ・ワールド株式会社の投資金集めであり、出版では採算が合わなくても、著名人との誌上対談で増田氏の箔をつけて投資金集めに資すれば、それでよかったです。それには、氏の人脈が大いに役立ちました。

- (3) 平成12年3月に『資本の意志』が創刊されて以降、私は、増田氏や江尻氏からも相談を受けることが多くなりました。

一例を挙げれば、増田氏が会長になっていたサンラ国際信託銀行の増資手続の件で、千代田区の紀尾井町にある大手法律事務所の国際弁護士を増田氏に紹介したことがありました。しかし残念ながら、「出資法に違反する疑いがある」という理由で、その弁護士からは受任を断られました。増田氏と江尻氏の「商売」が法律に触れるのではないかという疑いは、私も最初から抱いていました。

この頃私は、増田氏に招待されて、パラオ共和国へ同行したことがあります。その時の写真が『資本の意志』平成12年12月号の表紙となっていますので、本陳述書の末尾に【資料2】として添付します。増田氏と江尻氏はサンラ国際信託銀行のほかに、パラオ共和国でゴルフ場を開発すると称して多くの人から多額の出資金を集めていました。しかし、現地を見てみると開発の実態は全くない状態でした。そのような危なっかしい商売をしながら、増田氏は、「僕は人を騙すのが得意だ。」とか、「いざとなったら海外へ逃げる。」などと軽はずみな発言を平気でしておりました。私は、「警察沙汰にならないように注意しなさい。」とたびたび忠言しておりましたが、増田氏は気にするそぶりは見せませんでした。

- (4) 氏の人脈によって、結果として、増田氏と江尻氏は大きな利益を得たと思います。当初は十数人しか集まらなかった講演会に短期間で1000人を集客できるまでになったのは、氏の功績であります。

その反面、氏は増田氏らに不利益をもたらすこともあったようです。氏は天衣無縫で大雑把な人柄ゆえ、金銭にルーズなところがありました。経費を無駄に使い、たびたび親会社であるサンラ・ワールド株式会社に運転資金の援助を求めるため、江尻氏が私に泣きついてきたことがありました。私は江尻氏から、「さんは、さんの言うことだけは素直に聞く。さんから何とか言い聞かせてほしい」と頼まれました。

そこで増田氏・江尻氏と相談した結果、氏をサンラ出版の社長にすることが決まりました。自分の会社となれば、氏も責任を自覚して節制するのではないかという

目論見でした。しかし、氏の放漫経営はおさまりませんでした。そして平成13年のことですが、氏がサンラ出版の株式を『資本の意志』の読者に販売して資金を調達しようとしたことから、江尻氏が、「さんを解任したい。」と言い出したのです。私は、その仲介役を江尻氏と増田氏から頼まれました。憤慨する氏をなだめて全力を尽くした結果、一時は感情的な軋轢は生じたものの、最終的には増田氏が氏に謝罪をして円満な解決を果たしております。氏は社長を辞任し、サンラ出版の経営権は増田氏と江尻氏に渡ったのです。増田氏と氏の仲介役であった私は、この間の事情をよく知っており、その証拠として増田氏が氏に宛てたメールの中から1通を本陳述書の末尾に【資料3】として添付します。

- (5) 以上申し述べましたとおり、私はサンラ・ワールド株式会社やサンラ出版の役員ではありませんでしたが、増田氏・江尻氏と氏のそれぞれの相談役のような役割を無報酬で請け負っていました。増田氏は、私に対する親愛の証として、私の息子を会社に招きたいと言ってくれたことがあります。また息子がグアムで結婚式を挙げたときは、花輪を贈ってくれました。

しかし、平成13年に氏がサンラ出版の社長を退いて以降は、増田氏、江尻氏とは徐々に疎遠になっていきました。

### 3. 津田氏と私の関係

- (1) 私は津田氏とも面識があります。次に、津田氏との関係について申し述べます。

私が津田氏と初めて知り合ったのは、平成9年12月のことでした。私は、同年11月に横浜市で発生したある事件（事故）についての取材をしていた津田氏から、取材の申し込みを受けました。私は、立川市のホテルで津田氏からインタビューを受けたのが同氏との最初の出会いでした。それまで私は津田氏のことを知りませんでしたが、私の妻は津田氏がコメンテーターとして出演していたテレビ番組を何度か見ていて、同氏のことを知っていました。

津田氏が取材していたその事件に関する記事は『週刊現代』に掲載されましたが、掲載後も津田氏はその事件を執念深く追跡調査していました。多くの人から聞き取りを行ったり、自費で海外に渡航して調査したりしている津田氏の姿を見て、採算を度外視して真実を追求するジャーナリストとしてのその姿をあっばれと感心しました。

- (2) この横浜の事件は平成11年に裁判となり、確か一昨年まで裁判が続きましたから、この間に、津田氏からこの事件について何度か取材を受けたことがありました。

津田氏は私より30歳以上も若いのですがその正義感には感服するものがあり、頻

繁に会っていたわけではありませんが、会うたびに政治や経済のことや自分の身の回りのことなど、津田氏には何事も包み隠さず腹を割って話をしてきました。

増田氏やサンラ・ワールド株式会社の件は、雑談のなかの話題の一つとして、当初から津田氏に話していました。

#### 4. 「公認会計士の脅迫事件」について

- (1) 増田氏らと津田氏との間の裁判で争点となっているのは、『財界展望』に掲載された津田氏執筆の記事の中にあった「公認会計士の脅迫事件」の真偽であると大野弁護士から聞きました。

改めて申し上げますが、津田氏が記事に書いたことは、紛れも無い事実であります。私の手元に、東京地方裁判所が作成し被告サンラ・ワールド株式会社の代表者である江尻氏に宛てて発送した「口頭弁論期日呼出及び答弁書催告状」の原本があります。この裁判の原告が後に増田氏らに脅迫されることとなった公認会計士です。

この公認会計士は、平成12年にこの訴訟を起こしてからしばらく後、暴力団員風の数人の男から「増田先生に対する訴えを取り下げる」と脅されることとなりました。それが『財界展望』の問題の記事になっているわけですが、津田氏が書いている事実には間違いありません。私は事前には知りませんでした。この公認会計士に対して脅迫を行ったのは、氏、同氏が依頼した少林寺拳法の道場主である、右翼団体構成員らのグループであったと事後に増田氏ら自身から聞いておりますので、津田氏の記事は間違いないと私は言えるのです。

- (2) 先にも申し上げましたが、氏らがこの公認会計士に対して脅迫行為をはたらいたことは、私は事後に知りました。それは氏が脅迫行為を実行した当日のことでした。

私は氏から、公認会計士を「脅してきた。」と聞かされました。私は「なんて馬鹿なことをしたんだ。相手は公認会計士なんだから、被害届を出されたら大変なことになる。」などと戒めました。その日は中技振の総会が開かれた日でしたから増田氏と江尻氏もその場におり、氏はこの二人に、脅迫の成果を報告していました。

すると総会が終わったあと、増田氏と江尻氏は、公認会計士に脅迫を行った氏をねぎらうために『ご苦労さん会』をやろうと言い出し、池袋にある小料理屋のような店で祝杯を上げたのでした。その席には、私も同席しました。江尻氏は氏に現金の入った封筒を渡そうとしました。江尻氏は口にはしませんでした。が、「報酬」の趣旨であることは、会話の流れから推察されました。しかし氏は、「金のためにやったのではない。」と言って、お金を受け取りませんでした。その様子は、私も見ています。

後にこの公認会計士脅迫事件が発覚した後、増田氏は言を翻して、「脅迫行為は が

勝手にやった。」などと私を含む多くの者に弁明するようになりました。しかし、公認会計士を脅迫したきっかけとなったサンラ・ワールド株式会社に対する裁判の「口頭弁論期日呼出及び答弁書催告状」の原本を私は 氏から預かって持っているのです。江尻氏宛ての呼出状の、写しではなく原本を、 氏が所持し、それがその後に私の手に渡ったという事実は、増田氏と江尻氏が真っ先に 氏に相談したことの決定的な証拠であると私は考えます。増田氏が 氏による脅迫行為の実行を労う酒席を設け、江尻氏が同氏に謝礼を渡そうとした事実に照らせば、「 氏が勝手にやったこと」では通らないのではないかと思います。

## 5. 『財界展望』の記事に至る経緯

- (1) 次に、津田氏が『財界展望』の記事を執筆するに至るまでの経緯につき、私が知る限りのことを記します。

氏がサンラ出版で雑誌『資本の意志』の出版を始めて間もなくの頃でした。平成12年の夏頃、 氏が「フリージャーナリスト協会を作る」と言い出したことがありました。 氏は、「その世話役をぜひ津田氏にお願いしたい。」と私に言ってきました。私が、何度か津田氏のことを「優秀で鋭いジャーナリストだ。」と 氏に話したことを、同氏は覚えていたからだと思えます。 氏は、フリージャーナリスト協会の設立集会を開くというので、私はその旨を津田氏に話して会合に足を運んでもらいました。

しかしこの集会に行った後、津田氏はサンラ・ワールド株式会社と 氏のことを痛烈に批判していました。津田氏はこの集会で『資本の意志』を貰ったそうなのです。津田氏は、「あの雑誌をひと目見れば、サンラ・ワールドが詐欺的な出資金集めの会社であると分かる。その子会社が作った雑誌の編集長が幹事をする協会にまともなジャーナリストが集まるわけがない。真理と正義を追求するジャーナリストとは全く正反対の立場にある詐欺的金儲け集団が『ジャーナリスト協会』を名乗る団体を旗揚げするのはジャーナリズムへの冒瀆だ。」、そのようなことを津田氏は言っていました。

私は 氏・津田氏双方と知り合っていたので深く考えもせず津田氏に声をかけたのですが、よく考えてみれば、増田氏と津田氏とは性格も人生観も正反対であり、サンラ・ワールド株式会社の子会社が呼びかけた『フリージャーナリスト協会』に津田氏が協力するはずはありませんでした。しかし、立場上、津田氏の厳しい批判をそのまま 氏に伝えるわけにもいかずに黙っていたところ、 氏は津田氏の名前を無断で『資本の意志』(本陳述書末尾添付の【資料4】)に載せてしまったのです。そのことで、津田氏はさらに怒りました。「あんたを褒めて書いているのだから、構わないのではないか。」と私は言いましたが、津田氏は、「いかがわしい投資金集めをやっている会社のイカサマ雑誌に名前が載れば、それだけで不名誉だ。」と激怒し、以来、津田

氏は 氏のことを軽蔑し、二人が顔を合わせることはほとんどありませんでした。その後も、私はサンラ・ワールド株式会社や増田氏の内情を津田氏に話すこともありましたが、津田氏は関心を示しませんでした。「追うほどの価値もないザコ。放っておいても、いずれは警察に摘発される。」というのが、当時の津田氏の考えだったようです。

(2) ところが、翌平成 13 年になって事情が大きく変わります。

増田氏と江尻氏の友人で、中技振の理事になっていた豊永浩氏が経営していた大和都市管財という会社に警察の捜査が入ったことで、津田氏はサンラ・ワールド株式会社の商法に興味を持ったようです。

津田氏は、平成 13 年の夏頃からサンラ・ワールド株式会社の取材を精力的に始めるようになりました。それが記事になる可能性があるというのは、翌 14 年になってからのことです。

それが『財界展望』という雑誌で、この陳述書の冒頭に一部を引用しましたが、平成 14 年 9 月号に載った『投資の神様』は本当か？出資法違反も疑われる有名評論家増田俊男氏が集めた『40 億円』という題の記事でした。この陳述書を書く前に、津田氏の代理人である大野弁護士からこの記事の写しを提供され、読んでみましたが、この記事の内容はサンラ・ワールド株式会社の内情を知る私から見ても、真実であると言わざるを得ず、津田氏の取材力には驚くばかりです。

私は、『財界展望』の記事が載ってから間もなく、同誌編集部からサンラ・ワールド株式会社の代理人を名乗る弁護士から、内容証明で通知が届いたということを知りました。私は、津田氏の記事が雑誌に掲載されるということは聞いておりましたが、当時は記事そのものは読んでおりませんでした。ただ内容証明の発信人が「佐藤博史」という名の弁護士だと津田氏が言うので、「佐藤という弁護士は私は知らない。」と言うと、津田氏は、「同じ号の別のライターが書いた記事に対しても、佐藤弁護士から同時に内容証明が届いている。おそらく雑誌を読んで、自分の方からサンラ・ワールド社に売り込んだ弁護士だろう。私は真実を書いたのだから、何らやましいところはない。」と述べていました。津田氏は当の本人である公認会計士にも直接面談して、脅迫を受けた事実を確認していると私は聞いております。

(3) その後の経緯は詳しく聞いていませんでしたが、その年（平成 14 年）の秋頃になって、「編集者が「裁判は避けたい。賠償金は会社で払う」としつこく言うので、何度も反対はしたが、雑誌社に迷惑をかけられないので、やむなく示談に応じることにした。」と津田氏が言っていたのは覚えています。

それからしばらくして、増田氏は、懇親会などで、「すごいジャーナリストにも、僕は楽勝で勝った。くれとも言わないのに、自分からお金を持って謝罪してきた。」などと自慢げに吹聴しているという話を耳にするようになりました。私は増田氏からは色々な相談を受けて来た立場の者ですが、その話を聞き、「無理が通れば道理が引

っ込む」との謔ではないですが何とも言えない吐き気をもよおすような嫌な気分になりました。

## 6. 佐藤弁護士からの事件揉み消しの依頼

- (1) 氏がサンラ出版の社長を辞任した翌年（平成 15 年）1 月頃のことです。氏から、実家に神奈川県警高津警察署から事情聴取のための呼び出しがあったとの連絡が同氏からありました。公認会計士を脅迫した件で、被害届が出されていたらしいのです。

高津警察署から連絡があったその頃、氏は人目を忍んで生活していました。氏は、サンラ出版の社長を辞してから、サンラ・ワールド株式会社の商法を真似て数億円の投資金を集め破綻していたからです。債権者たちから身を隠し、詐欺や背任横領などで訴えられることを恐れて、氏は携帯電話の番号も変えていました。

そんな時期に、高津警察署から出頭を求める電話があり、氏はひどく動揺していました。そして氏が高津警察署に電話したところ、担当刑事から、「増田氏が昨年に出頭してきた。今回の脅迫事件はあんたがボスだと言っていた。」と聞いて、氏は激怒したのです。

私に電話をしてきた氏はひどく立腹していました。「なんで増田先生は、俺をボスと言ったんだ。それならば、俺は警察で増田先生から頼まれてやったことを話す。」などとすごい剣幕でまくし立てていました。氏は激昂すると収拾がつかなくなる気性のため、私はすぐにそのような電話が氏からあったことを増田氏宛てにファックスで連絡しておきました。

すると翌日、増田氏から私の自宅に電話がかかってきました。「私が言ったのではない。警察の方からさんの名前を出したのだ。」「脅迫は、さんが勝手にやったことだ。」などと増田氏は弁解していました。

- (2) その頃、増田氏から電話があり、「さんには、いろいろと無料奉仕でお世話になりました。何かプラスになってもらうことをしたいので、佐藤博史という弁護士に、ぜひ会ってほしい。」と言われたことがありました。私は、何の用件なのかよく分からないまま、増田氏から電話のあった翌日か翌々日に、港区の赤坂にある佐藤弁護士の事務所を訪問しました。

すると佐藤弁護士は突然高飛車な態度で全く予期もしていなかった話を持ち出しました。私は、氏から譲渡してもらったサンラ出版の株券を所有していたのですが、佐藤弁護士はそれを返せというのです。佐藤弁護士は興奮しており、「取締役会の承認がなければ譲渡できない株式だから、あなたが持っていることは違法だ。」と一方的にまくし立てておりました。「変な弁護士だな。」と思いつつも、私の発言を遮って「返

せ」と迫り続けるので、私は未公開株で売買できないもので持っていては価値がないので了承すると、佐藤弁護士は急に態度を豹変させて優しい口調になりました。

さらに佐藤弁護士は、私の友人である 氏が所有しているサンラ出版の株も返させるようにしろと私に言ったので、私はその友人を連れて後日、佐藤弁護士の事務所へ行ったことがあります。

- (3) それから程なく、私のもとへ佐藤弁護士から電話がかかってきました。氏は確か2月10日に高津警察署へ出頭することになっていたと記憶していますが、その何日か前のことでした。佐藤弁護士は私に対し、「さんが警察に出頭しても、増田さんの名前を絶対に出さないように さんから さんを説得して欲しい。」と言ってきたのです。その時は真意をはかりかねて確答はしなかったのですが、その後日に日を改め、今度は佐藤弁護士の事務所に所属する弁護士（名前は覚えておりませんが、声からして若い弁護士と推察しました。）から再び電話があつて、同じようなことを要求されました。「さんを黙らせることができるのは、 さんしかいません。」というようなことをさんざん言われました。さらに、その当日か翌日、再度佐藤弁護士から電話がありました。大阪から東京へ帰る新幹線の中から携帯電話でかけているということでしたが、用件はやはり 氏を口止めして欲しいとの要求でした。

私は、脅迫事件での取調べはあくまでも口実に過ぎず、神奈川県警の狙いは増田氏の出資金集めではないかと推測しました。増田氏の名前を 氏が警察に出せば大規模な詐欺事件に発展して 氏のためにもならないと思い、私は、「増田さんが捕まって詐欺か何かの罪でやられたら、あんたも共犯にされるよ。」と 氏に告げました。その言葉に効果があったようで、氏は何回も高津警察署に呼ばれて取調べを受けましたが、公認会計士の脅迫事件について、増田氏の関与については何も語らなかったのです。

増田氏の関与を 氏に警察で供述させないよう佐藤弁護士から私が要求されたことは間違いのない事実です。その頃から佐藤弁護士はサンラ・ワールド株式会社の投資金集めに違法性があることを十分に承知していました。それを裏付ける資料も手元に存在します。佐藤弁護士は、自己保身もあって、増田氏が刑事事件の被疑者となることをどうしても阻止したかったのだと思います。

## 7. むすび

- (1) このたび大野弁護士から、サンラ・ワールド株式会社に対して出資をした多くの投資家の方々が詐欺を理由に同社や増田氏らに対して返金を求めて裁判を起こしていると聞きましたが、同社と増田氏が津田氏を相手に起した名誉棄損の裁判はこれに対する報復であると推察いたします。

増田氏・江尻氏は様々な偽りを述べて、多くの投資家から何十億円ものお金を集めて浪費してきました。また同氏らと長年行動を共にして来た佐藤弁護士は、この資金集め行為は法に触れることをよく知っていたことに疑いはありません。

自らの行為を悔い改め速やかに返金をすべき立場にいる人たちが、正義を追求する立場から言論にて告発を行った津田氏を訴えるなど、話があべこべであります。

- (2) 先に申し述べましたとおり、増田氏や江尻氏が行っている出資金集めは法に触れるのではないかとの疑念を私は前々からもっておりまして。そのため私は、たびたび増田氏らに忠告してきましたが、増田氏らは、「弁護士からアドバイスを受けている。合法であることは弁護士が保証している。」などと述べて、聞き入れることはありませんでした。

私は別に増田氏らと喧嘩別れしたわけではありません。しかし、平成13年に氏がサンラ出版を退社したのを機に私と増田氏らとは徐々に縁遠くなっていったことは、私にとってはむしろ好ましいことでした。虚言を様々に弄した増田氏らによる出資金集め行為や江尻氏の尋常ではない浪費癖に、私は辟易していたというのが本当のところです。

- (3) 私は、先に申し述べましたとおり、無償で増田氏らの相談にのっていただけで、サンラ・ワールド株式会社の経営には関与していません。しかし、増田氏らが多くの投資家から出資を募った儲け話は詐欺性の極めて高いものであることを知っています。

投資案件ごとに具体的な根拠を挙げるとなれば際限がないので、増田氏の虚言癖を端的に示す例をいくつか挙げたいと思います。

増田氏は、平成12年頃から『時事直言』というファクス情報誌において、「長崎・広島への原爆投下と東京裁判に対する米大統領の対日謝罪を、私の力で2005年に実現する。アメリカの大統領や国務長官とは懇意で、私の誕生日には直接お祝いの電話がかかってくる仲だから間違いない。」などと公言していました。私が、「そんな実現できるはずもない大風呂敷を広げて大丈夫なのか。」と聞くと、増田氏は、「人の記憶は3年もあれば消える。もしも5年先に覚えている奴がいたら、その時はその時で、適当な理屈をつけて煙に巻けばいい。僕はそういうごまかしは得意なんですよ。」と答えていました。

またサンラ・ワールド株式会社は、年に何度か『増田俊男と行く海外ツアー』を企画し催行していました。相場よりもかなり高いツアーなので、このツアーへの参加者は大口の投資者が多いのです。サンフランシスコのツアーの際、ジャイアンツ球場に増田氏は参加者を引率した時、球場の超大型電光掲示板に「トシオ・マスダ、サンフランシスコによろこそ」という英文のメッセージが流れ、参加者が「増田先生はアメリカでも有名人なのですね。」と述べたところ、増田氏は、「不思議だ。私が観戦に来たことがどうして分かったのだろうか。だから有名人は困んだ。」などと応えたと、あ

る参加者から聞きました。私は、実はそれは事前に球場側に広告費用（日本円で約60万円）を増田氏が支払って仕掛けた演出であったとサンラ・ワールド株式会社の男性社員から直接聞いていたのですが、その参加者には本当のことが言えませんでした。

増田氏は、「人を信用させる一番のコツは断言。どんな嘘でも、断言すれば人を騙せる。」「嘘は大きくついたほうが人は信じる」、「いざとなったら海外へ逃げる。日本と犯人引渡協定を結んでいない国は幾らでもあるんですよ。金さえ持っていれば、いい暮らしができる」などと親しい仲間に得意げに話していたのを知っています。背伸びして自分をただ偉く見せるための単なる法螺ならともかく、増田氏は細かな演出をして虚構を作出し、それを信じた多くの人たちから莫大な金を集めているのですから、笑って許せる話ではありません。

他方、江尻氏はとてつもない浪費家です。江尻氏は3000万円もするという指輪をひけらかし、夫婦そろって年がら年中、ファーストクラスの旅客機で海外旅行をしています。真っ当な事業で稼いだお金で贅沢するのは自由ですが、増田氏と江尻氏の場合は人が預けた金を湯水のように使っていたので、私は「人様から預かった金ではないか。それを勝手に使って贅沢しているのが知れたら、罽毘を買う。」などと注意したところ、江尻氏は3000万円の指輪を人前ではあまりはめなくなりました。このエピソードは佐藤弁護士に会った時に同弁護士にも話をしたことがあります。これに対し、佐藤弁護士は「そういえば（指輪を）してた。それは確かにマズイ。」と同調していました。

(4) 私は、増田氏や江尻氏からたびたび相談を受ける立場にかついていたものとして、両氏の違法は投資金集めを阻止することができなかった良心の呵責を私は感じており、このたび真実を述べさせていただくことといたしました。

私は、高齢ではありますが、証言や事情聴取のお求めがあれば、健康が許す限り出頭する所存です。

以上

- 1966年 ●東京大学生協同組合を経て日経ジャーナル記者
- 1971年 ●24歳で単独渡米  
カリフォルニア州オークランドのカレッジにて、マネージメントを学ぶ
- 1976年 ●ロスアンゼルスにて増田俊男氏の下で豊販売・グッズセールスを担当する
- 1977年 ●米国財団法人日米スポーツ振興会設立、事務局長に就任  
●ロスアンゼルスにてJAPAN EXPOを開催  
●ロスアンゼルスにて日本語学圏共同システムのチャリティーショー主催  
●鹿児島県川内市長を通して遊兎(両価1万ドル)を寄贈する
- 1978年 ●ロスアンゼルス市スポーツアリーナにて世界武道大会を主催  
(ハリウッド100万ドルスター ショー・コスギ氏出演(世界10か国参加 武道のオリンピック))
- 1981年 ●経団連の依頼により、カリフォルニア州K税制ユニタリー・タックスの廃止運動を展開する
- 1982年 ●財団法人日本船舶振興会の笹川良一先生より、ロスアンゼルス市の日米文化会の運営資金として100万ドル援助に関して、尽力をつくす  
●カリフォルニア州輸出促進委員会駐在代表として帰国  
(カリフォルニア州の農産物輸出振興に活躍)  
●日米貿易摩擦にカリフォルニア州と日本のパイプ役として活躍  
●日米の貿易摩擦に関するコミュニケーションレベルにおける問題を基本的解決へのレポートを発表  
●自民党本部にて、江崎真澄(国際経済調査会長)主催でカリフォルニア州務長官マーチ・フォン・ユーを囲み会談  
●カリフォルニアワインその他農産物の対日輸出促進に協力するなどの  
取組ある旨向きな内容で終わる
- ホテル・ニューオータニにてカリフォルニア農産物フェア(これを契機に、カリフォルニアワインの対日輸出が促進される)
- 日米貿易摩擦解消のため、農産物の輸出促進 カリフォルニアから50社参加
- ホテルニューオータニ・名古屋国際ホテルにてカリフォルニア州務長官マーチ・フォン・ユーと記者会見
- 1986年 ●パシフィックフォーラムを開催  
中小企業の経営者・管理者を中心としたセミナー勉強会等
- 1987年 ●ダイヤモンド社より「アメリカで儲ける本」刊行  
●日本初のハリウッド映画ファンド20億円を集める
- 1990年 ●ハリウッド映画「兜(KABUTO)」の制作総指揮として活躍  
●日東書院より「アメリカンドリームをつかめ」刊行
- 1991年 ●ハリウッド映画「兜(KABUTO)」を日本で公開 国内だけで100万人を観客動員し成功裏に終わる
- 1992年 ●月刊経営塾主幹鈴木康雄氏に師事
- 1994年 ●外国人報道協会会長Dr・カーン氏と国際ジャーナリスト協会設立 インター・プレインユー誌発行
- 1995年 ●国際ベンチャー・ビジネス協会設立 代表世話人
- 1996年 ●アジア経済人懇話会理事長 前野徹氏補佐となる
- 1998年 ●増田俊男主幹と23年ぶりに日本で再会する
- 1999年 ●サンラ出版株式会社設立 取締役副社長 月刊「資本の意志」編集発行人  
日本フリージャーナリスト協会設立 世話人 自ぎゆよ日本国民会兼 世話人
- 2000年 1月 ●サンラ出版株式会社代表取締役 月刊「資本の意志」編集発行人